

牧師室から(2023.3.19)

作家の大江健三郎さんが先日亡くなった。昨年亡くなった私の実父と同じ 88 歳だった。40 年前、私が大学に入って何年か経った頃、別の大学の文学部に通う知り合いが、大江健三郎を薦めてくれたことがあった。思えばそれは慧眼であった。専門領域の違う人種との交わりには啓発されることが多いものである。その折に大江健三郎さんの初期の作品を 2 冊ほど読んだが、その一つに『個人的な体験』があった。それはそのタイトルが表しているように、彼の体験に基づく私小説である。ご存じの方も多いと思うが、大江氏の子息はハンディキャップを持っておられる。その小説においては、障害をもって生まれてくる子を見守る親の心境、葛藤を窺わせるものがある。

以前牧会していた教会で、やはり知的にハンディキャップを持っていた息子を持つご夫妻がおられた。お二人はその子が生まれる際に、既にそのような障害があるということ承知の上で、出産を決意されたと聞いている。お二人は、それでも彼と共に生きるという選択を採ったのである。とても和んでいたご家庭であったが、その子が（確か 30 代半ごろだったと思う）誤飲という不慮の事故のため突然逝去され、教会で葬儀を行った。

いつもにこにこした笑顔で両親と共に、毎週の礼拝にほぼ出席していた息子さんの幸せな姿をいろいろな方が語っていた。天国でも、両親や教会の皆に向かって「ありがとう！」とほほ笑んでいるかのような写真を見ながら、本当に心が温まる葬儀であったのを覚えている。

大江氏は小説家というだけではなく、政治的、社会的にもかかわる発言や行動をとってきた気骨のある人だったと思う。ただ、キリスト教には触れていたが、彼自身、信仰の道に入らなかったのは、私個人としてはとても残念である。

(鈴木淳一牧師)